

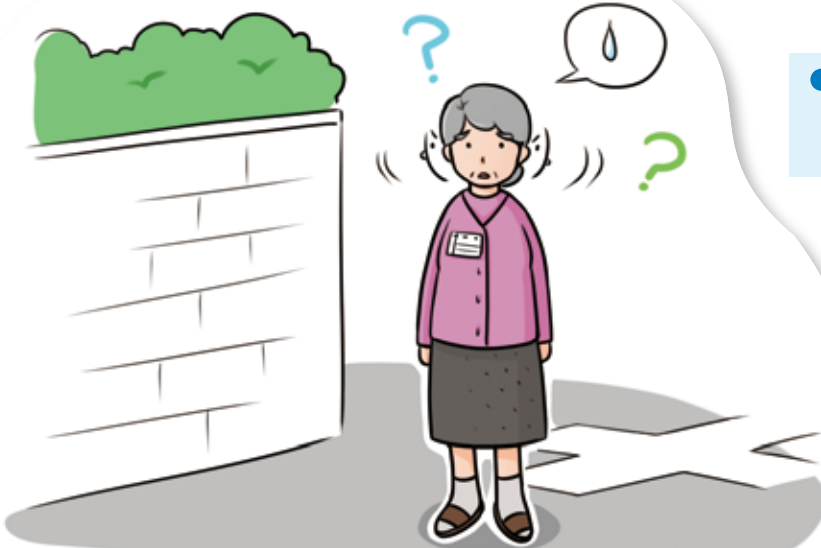
認知症

認知症の人は、記憶すること、理解や判断することが難しくなり、普段の生活ができなくなります。しかし、ある程度の段階までは歩いたり話をする事ができるため、外見的には認知症であるかがわかりません。しかし、認知症になったからといってすべてわからなくなるわけではありません。その人の不安な状況を取り除き、安心して生活できる状況があれば社会生活を送ることができます。

外出先などで
困ること

何をしに来たのかがわからなくなることがあります

買い物で支払いをするときに、お金の計算ができずにどの小銭やお札を出せばよいのかわからなくなり手間取ってしまいます。普段慣れた道や場所でも迷うことがあります。途中で行き先がわからなくなったり、買い物に来て何を買いに来たのかを思い出せません。



●自宅に帰る途中で、道に迷い、どうやって帰ってよいのかわからなくなることがあります。

●トイレの使い方がわからなくなったり、男女のトイレを間違えたりすることがあります。

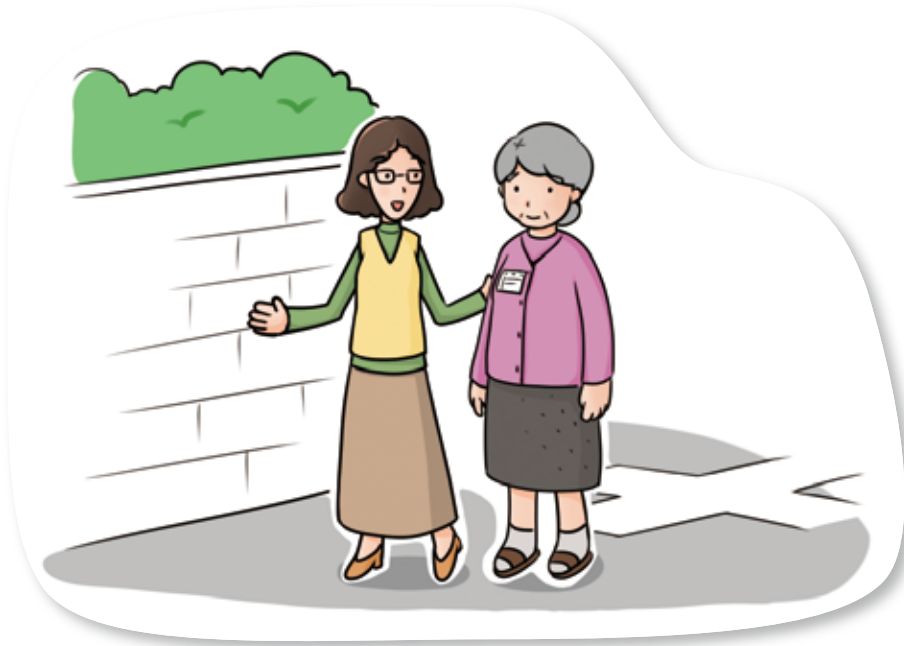




手助けしたい…でも、どうすればいいの？

手助けする際の 原則

支援する人の態度が認知症の方に伝わります。ゆとりをもって穏やかに話しかけましょう。一人の大人として尊重した態度で対応し、子ども扱いした言動をしてはいけません。また、できていないことやおかしい行動を指摘することはかえって不安を高めてしまいます。まず、本人の話をよく聞くことが大切です。そして、時間がかかってもよいことを伝え、その人のペースに合わせて見守ります。日によって、時間によって調子がいよいときと悪いときがあります。なじみのある地域の人たちの身近な支援が本人と介護する家族を安心させます。いつも同じように接することが大切です。



- 認知症の方が道に迷っていたら、家族に連絡するか家まで誘導しましょう。または交番に連絡してください。

一人の大人として尊重した
態度で対応しましょう。



- ちょっとした手助けがあればできます。「男子トイレはあちらですよ」と声をかけてみましょう。

身体障害者補助犬

身体障害者補助犬は、身体障害者補助犬法で認められている盲導犬・介助犬・聴導犬の総称です。この3種の犬には次のような役割があります。また、それぞれに法律で認定されたことを示す表示があります。

身体障害者補助犬の種類

盲導犬

認定番号	
認定年月日	
犬種	
認定を行った 認定法人の名称	
認定法人の住所 及び連絡先	



①盲導犬: 視覚障害のある人の歩行介助をします。



段の上に前足を置いて停止し、段差があることを知らせます。

介助犬

認定番号	
認定年月日	
犬種	
認定を行った 認定法人の名称	
認定法人の住所 及び連絡先	



②介助犬: 肢体不自由の人の動作介助をします。



落とした物を拾って、介助犬使用者に渡します。

聴導犬

認定番号	
認定年月日	
犬種	
認定を行った 認定法人の名称	
認定法人の住所 及び連絡先	



③聴導犬: 聴覚障害のある人に日常生活の音を知らせます。



前足で使用者にタッチして、玄関チャイムの音を知らせます。

外出先などで 困ること

犬にさわったり、 食べ物を与えられたりすると困ります

身体障害者補助犬の使用者は、次のようなことに困っています。

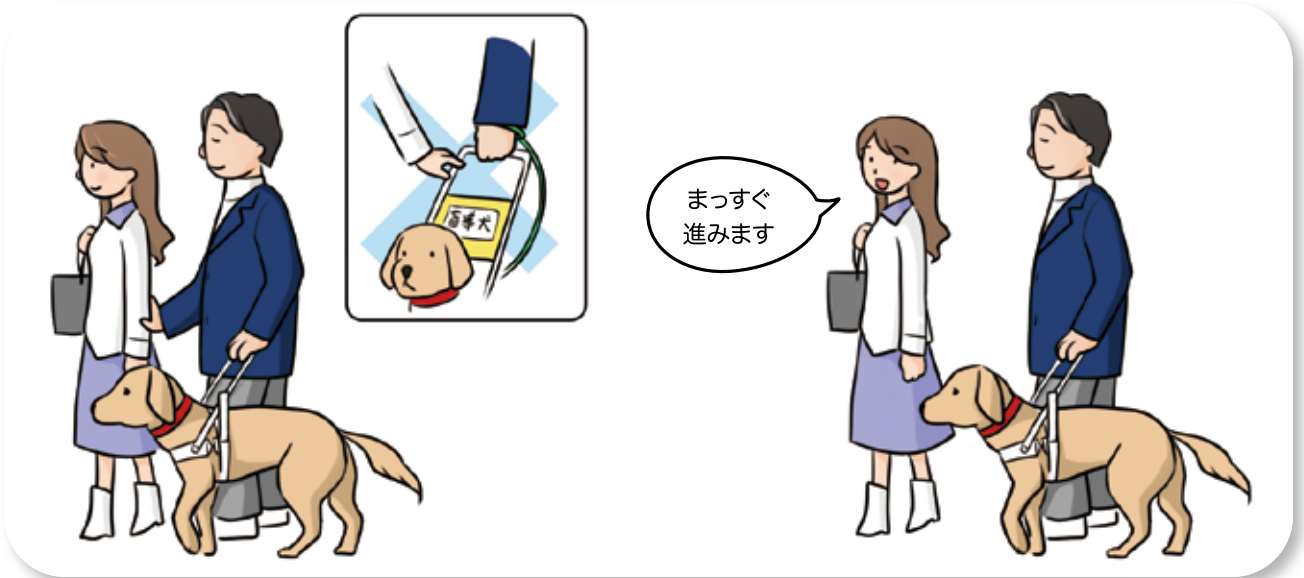
- ①犬を理由に入店拒否や利用拒否をされること
- ②使用者に無断で犬をさわられること
- ③犬に声をかけられたり、手をたたいて犬を呼んだりされること
- ④犬に食べ物や水を与えられること



手助けしたい…でも、どうすればいいの？

手助けする際の原則

基本的には視覚障害のある人、肢体不自由の人、聴覚障害のある人に対する支援の方法と同じです。「補助犬がいるから何の支援も必要ない」というわけではありません。例えば、盲導犬使用者は頭の中の地図をもとに歩いていますが、初めての場所などでは道に迷うことがあるので、一般の人が「何かお困りですか」と声をかけてくれると助かります。車いすに乗っている介助犬使用者の場合、高い位置にある物を取るときには人による支援が必要です。聴導犬使用者は、聴導犬では知らせることができない情報がある場合に、周囲の人が教えてくれることを望んでいます。



- 盲導犬使用者を誘導するときはハーネスを持たず、肘や肩につかまってもらいます。また、使用者の前を歩く場合もあります。



- 車いすに乗っている介助犬使用者が高い位置にある物を取りたい場合、周囲の人に「取ってください」とお願いすることがあります。



- 聴導犬は車内放送の内容を伝えることができません。紙に書くなどして、聴導犬使用者に見せてください。

言語障害

言語障害は、言葉を理解することや話すことが難しい状態をいいます。

音声や発音(構音)、話し方の障害には、発音が正しくできない「構音障害」や発語時に言葉が連続して出る「吃音症」などがあります。言葉の理解や表現の障害には「失語症」や「言語発達障害」などがあります。

特性・困ること

うまく言葉にできないので誤解を招きます

話さないと周囲の人にはわからないので、困っている状況が理解されにくい障害です。

言語障害のある人は、話す内容ではなく話し方に注目されることがあります。そのため、話している相手に不信感をもたれたり、不愉快な態度を取られたりすることがあります。また、うまく言葉にできないことや相手に伝わらないことから話す意欲を失う場合もあります。



- 話す言葉が間違っていたり、伝わらなかったりした場合、大人に言い直しをさせられることがあります。



- 周りから話し方への過度な意識をもたされたり、話すことへの意欲を妨げられたりすることがあります。

? 手助けしたい…でも、どうすればいいの?

手助けする際の原則

言語障害のある子どもと話すときは、ゆっくり、じっくり話を聞きましょう。言葉や言い方を間違えても誤りを指摘したり、言い直しをさせたりせず、大人が正しい発音を聞かせてあげることが大切です。子どもが伝えたいと思っていることをくみ取ってあげましょう。

言語障害のある人の話を聞くときは、相手がかつろいだ気分で話せるように心がけることが大切です。話を途中でさえぎったり、誤りを訂正したりしないでください。言語障害のある人には、短い簡単な言葉でゆっくり話しかけます。話しかけて一度で理解できないときは、もう一度繰り返すか、別の表現に変えてみます。言語障害のある人の話したい言葉や行動を先取りしないようにし、ゆっくり待つことが大切です。また、失語症の場合には、「はい」「いいえ」で答えられるように話しかけることが大切です。小さな子どもを相手にするような接し方は適切ではありません。



- 周りの大人は、子どもの話し方に注目するのではなく、話す内容に耳を傾けましょう。子どもの話を最後まで聞き、子どもが伝えたいと思っている内容をくみ取ることが大切です。

色弱 (色覚異常)

特性・困ること

特定の色の区別が難しいことがあります

色弱(色覚異常)とは、色の見え方や感じ方が、色弱(色覚異常)のない人たちと異なっている状態をいいます。ひとの目の網膜には、赤、緑、青を感じとる視物質があり、これらの働きによって色を認識しています。しかし、色弱(色覚異常)の人はこの視物質が欠けていたり、十分な働きをしていません。そのため、特定の色の区別が難しかったり、文字や情報を見落としてしまうことがあります。

? 手助けしたい…でも、どうすればいいの?

手助けする際の原則

色弱(色覚異常)の人が区別することが難しい色の組み合わせを知ってください。代表的なものは緑と赤です。黒板に赤のチョークで文字が書かれている場合には、読みづらいどころか、文字が書いてあることに気がつかない人がいます。

色弱(色覚異常)の人は、日本に300万人以上いるといわれており、決して珍しくありません。日頃から、色弱(色覚異常)の人が区別しにくい色の配色を避けるようにしてください。

区別がつきにくい色の組み合わせ例



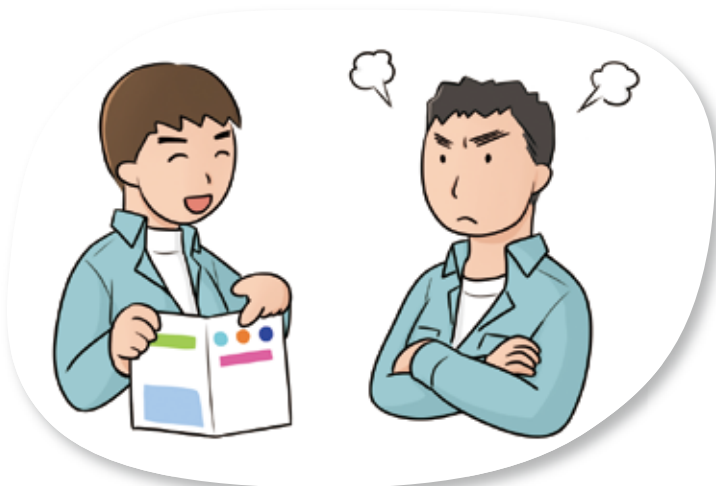
緑と赤



黒と赤



灰色とピンク



- 相手が色弱者であると知ると、「これは何色に見える?」と尋ねてしまう人がいます。この質問は色弱(色覚異常)のある人を悲しませたり、怒りを感じさせたり、何と答えればよいのかわからずに困らせてしまうことになることを知ってください。



- 色弱者は色で区別されている路線図を見ても、自分がどの線に乗ればよいのかわからず、とまどうことがあります。